

ロシアの(軍事的)安全保障観の視座に基づく日ロ関係の展望(要旨)

ロシア安全保障・軍事問題アナリスト
三井光夫

北東アジアにおける地域協力の可能性は、この地域の政治情勢の影響を受ける。日中、日韓関係が短・中・長期的に改善される見通しのない一方で、未だ平和条約未締結の日ロ関係は改善に向けた兆しをみせつつある。しかし、実際の展望はどうか。以下では、ロシア側の事情を概観した上で、次の3つのシナリオを検証する。第一のシナリオは「ノーマルな日ロ関係へと発展」、第二のシナリオは「中ロ関係の変化から日ロ関係がノーマルな関係へと発展」、そして第三のシナリオは「日ロ関係の深刻な悪化」という展望である。

(1) ロシアの「守り」の立ち位置とそれを保証する戦略的方策

1985年にミハイル・ゴルバチョフが旧ソ連邦の指導者として登場して以降、ロシアの立ち位置は、それまでの「攻勢的」から「守勢的」なものへと大きく転換した。この立ち位置はウラジーミル・プーチン大統領の今日時代まで続いており、「守り」の態勢を固めることがプーチン・ロシアのいわば核心的戦略課題となっている。そして、ロシアは「弱者」の立ち位置の裏返しとして「強いロシア」を志向し、富国強兵を目指している。

この「守り」の立ち位置を保証するために、プーチン・ロシアは4つの戦略的方策を追求している。第一は国内の安定化、第二はロシア外縁に善隣地帯(特殊影響圏/バッファゾーン)を構築、第三は国際法及び各種枠組みの重視(法による防衛)、そして第四は最後の拠り所としての軍事力保有(特に戦略核による抑止=戦略的安定化)である。

(2) シナリオの検証

第一のシナリオ：ノーマルな日ロ関係へと発展

第一のシナリオは、平和条約未締結な日ロ関係が、北方領土問題を解決して平和条約を締結し、ノーマルな国家関係になるだろうというものである。

ロシアは、ロシアの外縁全周に善隣地帯として、CIS諸国、中国及びインドから成るベルト地帯を作り上げているが、日本正面はこの善隣地帯の空白地帯となっている。そのため、ロシアは平和条約を締結し、日本を取り込むことによって、経済交流の一段の促進を図るとともに、空白のない善隣地帯の構築を目指そうとしている。実際、これまでもプーチン・ロシアは善隣地帯にある国々と長年未解決であった国境問題を積極的に解決しており、北方領土問題の解決にも大いに意欲を持っているとみてよい。しかし、プーチンは強固な戦後の秩序維持論者であることから、戦争の結果得たと考えている北方領土を返還するとは考えづらい。では解決策はないかといえば、56年日ソ共同宣言がそれを可能にするだろう。対外的な国際公約である同宣言に基づけば、プーチンは戦後の秩序維持論者の立場を守ったまま、領土返還(二島返還)を行うことができる。それゆえ、プーチンが考えている解決策は、四島返還や面積のフィフティー・フィフティーの解決策ではなく、共同宣言に依拠する厳密な二島返還であろう。したがって、日本側が二島返還でよしとすれば北方領土問題は容易に解決するだろう。その反面、これによって日本側はかつてないほど二島返還か四島返還かの選択の決断に迫られているといえる。

また、北方領土問題（の政治面）が解決の兆しを見せたとしても、軍事的信頼醸成措置の課題（たとえばロシア軍から日本領における米国のMDの排除の条件が付けられる等）が、日本の同盟国である米国も巻き込み解決困難な問題としてクローズアップされ、解決を阻むモーメンタムとなる可能性がある。

それ故、第一のシナリオの成否はプーチン・ロシア次第というよりも、むしろ日本の北方領土政策（二島返還への政策転換の困難性）と軍事的信頼醸成措置の問題（米軍関連がネック）に依存し、この2つの要素によって第一のシナリオは悲観的にならざるを得ない。

第二のシナリオ：中口関係の変化から日口関係がノーマルな関係へと発展

第二のシナリオは中口関係の変化（悪化）から日口関係はノーマルな関係（領土問題を解決し平和条約締結）へと発展するだろうというものである。

専門家の一部は、「ロシアは、中国との経済・人口の格差拡大に伴い、中国に軍事的不信感を増大させる一方で、政治・外交でバランスをとりその安全を確保しようとしており、日本との関係も強化しようとするだろう」と予測し、中口関係の悪化から日口関係がノーマルな関係へと発展する可能性を展望している。

しかし、南方進出・拡張政策を採っている中国は、同国の後背地であるロシアとの良好な関係を維持することが必要不可欠であり、実際にもロシアと善隣友好協力条約を締結し、ロシアが希求する善隣地帯の一角を忠実に構成している。さらに中国は内政不干渉や法による防衛面でもロシアと価値観を共有し、MD問題や欧米諸国からの人権攻勢にも共闘している。その視点からすると、中口間の問題とされる事象は、いわばコップの中の些細な問題でしかない。「守り」の立ち位置にあるプーチン・ロシアにとって、中国はむしろ好ましい隣国であると言える。それ故、このシナリオの見通しはまことに小さいといってよい。

第三のシナリオ：日口関係の深刻な悪化

第三のシナリオは、日口関係は深刻に悪化するだろうというものである。そうした事態は、第一に米国の力に対抗しようとして、中口が非公式の同盟を作った場合、第二に対米優位に立とうとして、中口がさらに接近した場合、そして第三に両国が共通の利益のために障害を乗り越え結託する可能性がある場合（欧米の民主化推進策やNATO拡大が中口の利益に反する場合や、周辺諸国の紛争をめぐって中口が欧米諸国と対立する場合）に生じる可能性があると考えられる。つまりこのような場合、米国と同盟関係にある日本はその影響を受け、ロシアとの関係が悪化すると考えられる。

このため日本は普段から米口関係や中口関係を注視し、日口の外相・防衛相から成る2+2の戦略的対話の場等を大いに活用するとともに、外交・経済の総合力を活用して、こうした事態を回避する努力をする必要がある。第三のシナリオが起こる可能性は、この努力如何となるだろう。

(3) 結論に代えて

日口関係の主要なシナリオを展望してみると、楽観的な展望は描き難い。結局、日本を取り巻く北東アジアの戦略環境に変化はなく、現状のまま推移し、短・中・長期的に日本を取り巻く戦略環境は不安定なままの展開となることが予測される。